

昭和42年生まれ。不知火町在住。九州学院中・高卒。中学校で野球部、高校では自転車部に所属。高校2・3年生のときにインターハイ・国体で優勝。高3のジュニア世界選手権では第3位。その後競輪選手となり、長らく最高ランクのS級に在籍し続けるなど活躍し、今もプロの世界で現役で戦っている。

競輪界で「プロ」であり続ける



vol.50

宇輝人

競輪は厳しい「プロ」の世界。幾多の苦難を乗り越え34年間続けてきた。ずっと楽しかったから――

最強スプリント選手登場

中高一貫の九州学院中3年生の時、中体連で野球に別れを告げた少年は、学校に張り出されていた自転車レース「日本一」の高校の先輩を見てふと思う。

「これなら自分にもできる
幼いころ、幾度となく父親に連れられて行った競輪場。体力にもすこぶる自信があった自転車好きの少年は、声高らかに宣言する。

「高校生になったら自転車部に入る。」
そこからはスター街道を駆け上がる。けがで出場できなかった1年生の大会を除くインターハイ・国体のスプリント競技で優勝。3年生で出場したジュニア世界選手権では銅メダルを獲得する。まさに最強の高校生。

「プロ」の世界が見せたもの

高校卒業後、意気揚々と進んだ競輪の世界。プロデビューしてすぐのレース中に左鎖骨の骨折という大けがを負う。
相手と1対1で戦っていた高校時代には、競技中、ぶつかってくる選

手はいなかった。

「プロ」の世界は、相手が8人。コーン取りでひしめき合いながら、トップを争う姿は、格闘技に例えられることもある。

――骨がつかうたら大丈夫。またトップスピードで駆け抜ける。そんな19歳の自信は崩れ去る。
――回復したのに何かが違う。自転車が進まない、バランスがおかしいリハビリ中、復帰に向けたトレーニングをろくに積まない、若さがゆえの甘い考えが結果となった。

――やばい、失敗した
初めて挫折を味わった瞬間だった。結局、元の感覚に戻るまでに1年以上を費やすことになったが、この教訓を胸に、その後は大きなけがと無縁の日々を送ることができている。

52歳、なお現役

2019年7月、デビューから33年目で歴代33人目の通算500勝を達成。今なお現役を続けている。
「いつまでという目標はないけど、体力・気力が持つ限り続けたい。」
自分の限界はまだ先にある。

「私たちはプロ。限界は本人にしか分からない。冗談ほくやばいね」と言うこともあるけど、本音を言葉

にしたらプロとして終わりですよ。」と倉岡さんは笑う。

20年間練習を共にしてきた大窪輝之さんは「僕らにとってはスター。今では弟子の面倒見がいい先輩でもありますね。」と話す。

現在も多くの弟子たちと練習を続けながら、毎週のようにレースで全国へ遠征している。

「弟子の目標になっていきたいです。年を取ってもやれるぞという姿を弟子や子どもたち、いろんな人に見せられたら。」

この気持ち、倉岡さんの今のモチベーションにもなっている。
矢沢永吉のコンサートもその1つ。年末に「永ちゃん仲間」と行くこの定例会は、若い時からの楽しみであり、1年間の目標だ。
されど、52歳。調子が上がらないときもある。

「気持ちが上がらなくても、やるのがプロ。」
「プロ」としての意地が自らを奮い立たせる。それでもどうしようもないときもあるが、そのたびに「永ちゃん仲間」が助けてくれた。

一緒に歩んでくれる人たちの存在が力の源。進む気持ちが続く限り、挑戦は終わらない。



弟子や後輩たち 共に行う練習は常に真剣

通算500勝の表彰式

「永ちゃん仲間」と定例会